

初期ビザンツ期教会堂建築におけるアプシス周辺構造の型式変遷 —パレスチナ中部ユダヤ・サマリア地域の場合—

藤澤 綾乃*

Transformation of Apsis Types with Lateral Structures in Early Byzantine Churches: A Case Study in the Judea and Samaria Region

Ayano FUJISAWA

本稿では、初期ビザンツ期ユダヤ・サマリア地域における教会堂建築のアプシス周辺構造の型式変遷に着目する。これまでにネゲヴ地域やガリラヤ地域では、主アプシス両側の構造が小部屋から副アプシスへと改変された事例が多く確認されている。その現象は6世紀に起こっており、型式変化は典礼の在り方や聖人・殉教者崇敬の発展と関わりがあると考えられてきた。本研究では、ユダヤ・サマリア地域を対象に分析した結果、主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式が6世紀頃から出現することを追認した。一方、大半の教会堂は主アプシスの両側に小部屋を伴う型式を維持していたことも明らかになった。後者を踏まえると、建物の型式変化が典礼の在り方や聖人・殉教者崇敬の発展と関わりがあったとは考えにくい。

キーワード：初期ビザンツ、教会堂建築、アプシス、キリスト教

This paper focuses on the transformation of apsis types with lateral structures in Early Byzantine churches in the Judea and Samaria region. In the Negev and Galilee, many cases of an apsis with lateral structures have been confirmed suggesting a transformation from mono-apsidal to tri-apsidal churches. This phenomenon occurred in the 6th century, and it is thought to be related to the liturgical methods and expansion of the cult of the saints and martyrs. Through analysis of the Judea and Samaria region, this study re-confirms that the tri-apsidal churches appeared starting around the 6th century. However, it was also revealed that most churches maintained the mono-apsidal style. Based on the latter result, it seems necessary to reconsider the relationship between the transformation in the churches, liturgical methods and expansion of the cult of the saints and martyrs.

Keywords: Early Byzantine, church, apsis, Christianity

1. はじめに

初期ビザンツ期のパレスチナ（図1）は、ローマ帝国の介入も相まって複雑な歴史変遷を辿ってきた。キリスト教の在り方もまた、その社会的傾向に左右されつつ変化していったと考えられる。本稿は、教会堂建築のなかでも至聖所の一部として重要な機能をもつ主アプシスとその両側の構造の型式変遷に焦点をあてる。教会堂での典礼はアプシス正面の空間を中心に行われるため、その周辺構造の変化を辿ることで、当該期のキリスト教信仰の在り方にせまることを目的とする。

パレスチナでは、現在までに初期ビザンツ期の教会堂遺構が400基ほど確認されている（Patrich 2006b: 351）¹⁾。地理的には北からガリラヤ地域、サマリア地域、ユダヤ地域、ネゲヴ砂漠地域と呼ばれ、聖書学、

神学、美術史学、歴史学、考古学など多方面から研究が進められてきた。本稿では、ユダヤ・サマリア地域²⁾を分析対象とするが、その研究意義としては以下の3点が挙げられる。第一に、当該地域は聖書の言及と密接に関わりがあり、パレスチナのキリスト教化について検討する上で最も重要な地域であるということである。第二に、当該地域はネゲヴ地域やガリラヤ地域と比べて、エルサレムを除けばローマ的都市が少なく村落遺跡が研究の中心となる地域であるため、キリスト教が土着の宗教としてどの程度根づいていたのかを検討する際に適しているということである。そして第三に、当該地域はその大半が現パレスチナ自治区に位置しており、イスラエルと諸外国が先導する昨今の研究では活発に議論されていない地域であるということである。従来のパレスチナにおけるキリスト教考古

*東京文化財研究所文化遺産国際協力センター

Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

西アジア考古学 第22号 2021年 109-124頁 ©日本西アジア考古学会

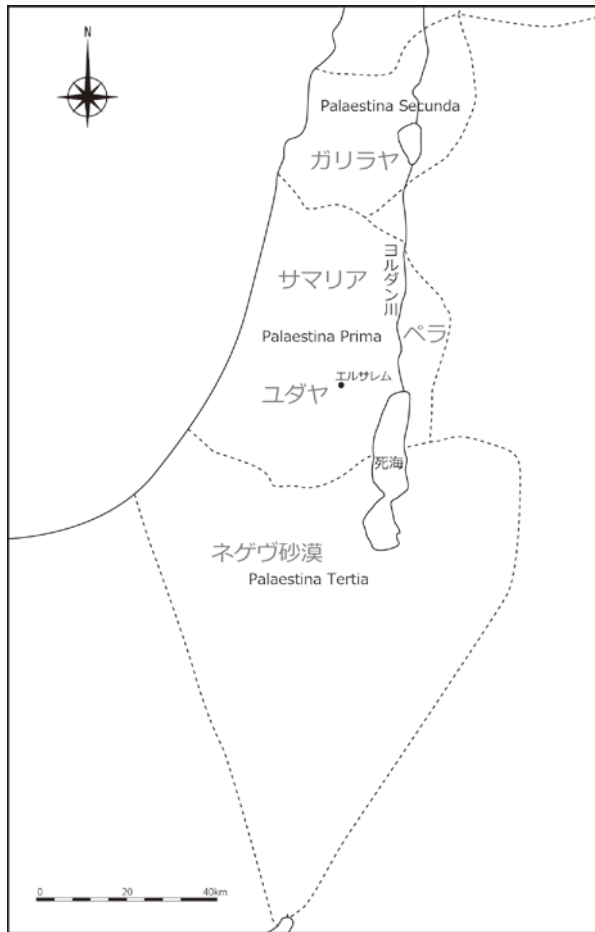


図1 パレスチナの地域区分図 (Stemberger 2000: 8 に基づいて筆者作成)

学の研究では、ネゲヴ地域とガリラヤ地域の調査が顕著であり、その中でも都市遺跡が中心的に取り上げられてきた。それらの地域に関する先行研究に鑑み、ユダヤ・サマリア地域について同様の分析を行なうことは、初期ビザンツ期のパレスチナの全体像を把握する上で意味があると考えられる。

パレスチナにおけるキリスト教関連の考古学的調査は20世紀初頭の踏査に始まり、発掘調査とその集成、再検討も盛んに行われている³⁾。なかでも、遺構の年代決定については様々な見方があり、文献史料と考古資料の照らし合わせが基本的な手法とされる⁴⁾。そうした中、ネゲヴ地域では早くから教会堂建築の型式に関する分析が行われており、6世紀頃からアプシスの周辺構造が大きく改変されていたことが指摘されている (Negev 1974, 1993; Margalit 1989)。それに続いて、ガリラヤ地域の一部でもその傾向が認められることが示されている。本稿では、ユダヤ・サマリア地域を対象とし、上述の指摘が当該地域にも当てはまる現象であるかを検証する。

2. 研究史

建築型式から教会堂の年代を決定する手法は、J. W. クロウフット (Crowfoot) に端を発する (Crowfoot 1941)。クロウフットによれば、パレスチナのバシリカ式教会堂では、東端の主アプシスが壁の内側に収められ、その両側に小部屋を伴う型式が多いとされる⁵⁾。一方、主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式も複数確認されたことが指摘されている。当該型式はパレスチナの中でもネゲヴ地域 (図2) に限定的であり、6世紀頃から出現したとされる (Crowfoot 1941: 68-72)。

その後、出土件数が増加したことで、A. オヴァディア (Ovadia) は教会堂の建築構造を1基ずつ取り上げて型式分類を行った (Ovadia 1970)。先のクロウフットの分析は、主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式をネゲヴ地域のみに認めていたが、オヴァディアの分析ではネゲヴ地域の特異性ではないことが示された。これは、出土件数が増え、ユダヤ・サマリア地域やガリラヤ地域でも確認され始めたことによって得られた見解である (Ovadia 1970: 194-195)。

主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式については、A. ネゲヴ (Negev) と S. マルガリット (Margalit) がネゲヴ地域を対象にして詳細な分析を行った。ネゲヴ地域ではニッザナ (Nizzana)、シヴタ (Shivta)、アヴダット (Avdat)、マムシト (Mamshit) から計10基の教会堂遺構が確認されており、ネゲヴは出土遺物などからそれらの創建年代を示した (Negev 1974)。その後、ハルザ (Haluza) の東教会堂も加え、当該地域の教会堂は時代を経る毎に主アプシスの両側に小部屋を伴う型式から副アプシスを伴う型式へと改変される傾向があったことを確認した (Negev 1993)。ハルザの東教会堂では、南側の副アプシスから聖遺物箱 *Reliquarium* も検出されたため、ネゲヴは当該地域で聖人・殉教者崇敬が広がったことが教会堂の型式変化に繋がったと結論づけた。換言すれば、副アプシスは上述の儀礼に関する役割を担ったということである。

マルガリットは、ネゲヴの見解を追認しつつ、マムシトの東教会堂、ニッザナの南教会堂、ハルザの東教会堂、アヴダットの南教会堂を取り上げて検討した (Margalit 1989)。マムシトでは、4世紀中頃に創建された西教会堂と5世紀中頃に創建された東教会堂が知られているが、いずれも主アプシスの両側に小部屋を伴う型式であり、上述のネゲヴが示した傾向に沿っていないことから、ネゲヴ地域においても全ての教会堂が副アプシスを伴う型式へと改変されたわけではないことも示した⁶⁾。さらに、マルガリットはパレスチナ全域の教会堂型式についてリスト化している。それに



図2 教会堂が出土したネゲヴ地域の遺跡

よれば、ネゲヴ地域では主アプシスの両側に小部屋を伴う型式が8基で、そのうち3基はのちに副アプシスへと改変されたとされる。それらとは別に4基の教会堂が創建当初から副アプシスを伴う型式であったとされる。つまり、12基中7基が6世紀以降に副アプシスを伴う型式となり、5基は小部屋を伴う型式を維持したということである。なお、その後は、ルヘイベ(Ruheibe)からも2つの教会堂遺構(中央教会堂及び北教会堂)が検出され、北教会堂は副アプシスを伴う型式であることが明らかにされた(Tsafrir 1993)。

マルガリットは、ネゲヴ地域の事例に加えて、ガリラヤ地域のヒルベト・ヘシェク(Kh. Hesheq)とヒルベト・エイラヴ(Kh. Eirav)の事例について検討し、教会堂の型式変遷を確認した。その結果、いずれの教会堂も主アプシスの両側に小部屋を伴う型式として4世紀に創建され、その後6世紀に小部屋は副アプシスへと改変されたことが示された⁷⁾。以上を踏まえて、マルガリットは、パレスチナ全域では主アプシスの両側に小部屋を伴う型式が54基、主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式が41基あることを示した。さらに、パレスチナでは前者から後者への型式変遷が顕著であることも確認した。この型式変遷の現象には、3つの要因が挙げられるとされる。第一に挙げられるのは、教義の変化であり、オルトドクス(正教会)が単性論に勝ったことによるという。第二に挙げられるのは、聖人・殉教者崇敬の発展によるという。そして第三に挙げられるのは、キリストとキリストに

続く聖人、殉教者が神学的にも典礼においてもほぼ同等に扱われるようになったことによるという(Margalit 1989: 155)。しかし、その論拠については十分に示されなかった。また、上述のリストにはユダヤ・サマリア地域も含まれているものの、その中には考古学的情報が不明確な事例も多く含まれており、とりわけ各遺構の年代については再考の余地が残されている。たとえば、エルサレムの聖墳墓教会やエレオナ教会は、主アプシスの両側に小部屋を伴う型式とみなされているが、それについては意見が分かれている。一方、主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式でありながら4世紀に年代づけられている事例もリストには含まれている⁸⁾。もっとも、マルガリットの分析対象はネゲヴ地域とガリラヤ地域を主軸としていたため、ユダヤ・サマリア地域の建築変遷の検証については未到達であったと考えられる。また、ガリラヤ地域についても取り上げられた事例は2基に留まっており、アプシス周辺構造の改変が6世紀以降の教会堂建築において主流であったとは捉えがたい。

2000年代以降は、J. パトリック(Patrich)の分析も挙げられる(Patrich 2006a)。パトリックは、ネゲヴの分析を追認しつつ、副アプシスの有無よりも小部屋に仕切りがあるか否かに注目し、さらに教会堂横に付設された小礼拝堂と関連づけて検討した。その見解によれば、もともとは、聖体拝領の役割の一部は主アプシスの両側の小部屋が担っていたとされる。小部屋には奉納物が保管され、それらは聖体拝領の際に主アプシス正面の祭壇に移された⁹⁾。そして、その機能は5世紀後半頃から新たに導入された小礼拝堂に移されたとされる。それによって、主アプシスの両側の小部屋は仕切りのある空間から仕切りのない空間へと改修され、一部の教会堂では副アプシスが設けられたと見解づけた。しかし、この傾向はネゲヴ地域では顕著であったものの、パレスチナ全域において同様の傾向が見られたわけではないことも指摘した。つまり、5世紀以降に教会堂が新設された際、必ずしも奉納物の保管庫としての機能が小礼拝堂に移されたわけではなく、旧型式の教会堂が建設されることもあったとされる。これらの見解をまとめると、小部屋が仕切りのある空間であった場合には奉納物を保管する役割を担い、仕切りのない空間であった場合には聖人・殉教者崇敬の役割を担っていたということである。この見解は、典礼の在り方の変化についてネゲヴやマルガリットの見解をより明確に支持したものであるが、ユダヤ・サマリア地域については大きく論じられていない。

3. 問題の所在と本稿での課題

上述の通り、ネゲヴ地域ではアプシス周辺構造が改

変される事例が半数以上あり、ガリラヤ地域においてもその傾向が認められることが先行研究では示された。しかし、その傾向は全教会堂に該当したわけではなく、加えてユダヤ・サマリア地域の教会堂については十分な検証がなされていない。そのため、アプシス周辺構造の変遷については確かな理解が得られていないと考えられる。その要因として、当該地域は現在に至るまで人的・自然の双方において相当の破壊を被っており、多くの遺構において建築変遷の細部に関する考古学的検証が難しい状況にある。とりわけ、主アプシスの両側の小部屋についてはその存在さえも不明瞭な遺構が多く、さらに小礼拝堂との関わりについては推測の域を出ない。また、ユダヤ・サマリア地域の大部分は、地理的には現パレスチナ自治区に位置しており、イスラエル／パレスチナの諸問題も相まって資料的な制約が大きいことが挙げられる。しかし、近年はパレスチナ考古局による調査も活発になりつつあるため、最新の情報も踏まえて再検討する必要がある。本稿では、アプシス周辺が考古学的に明らかにされている遺構を扱い、主アプシスの両側に小部屋を伴う型式と主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式の出現時期について精査する。

4. 分析方法

分析は、現在までに発掘調査が行われている教会堂遺構 122 基のうち、上述の 2 つの型式に該当する遺構 47 基を対象とする。なお、従来の遺構の年代決定は、基本的に発掘者の解釈に依拠しており一定の基準は明示されていない。先行研究では遺構の創建年代と利用年代を区別して議論した事例が少ないため、本稿では以下の基準に則って遺構を整理しつつ、型式変遷を追うことにしたい。

大分類

- A：創建年代を推定できる遺構
- B：利用年代を推定できる遺構
- C：年代決定の根拠が不明瞭で、創建・利用年代の双方が明確ではない遺構

小分類

- 1：文献史料によって年代を推定できる遺構
- 2：銘文資料によって年代を推定できる遺構
- 3：文献史料や銘文から年代を推定できない遺構

現在までに発掘調査が行われた事例のうち、主アプシスの両側に小部屋を伴う型式については 31 基、主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式については 16 基を確認した（図 7-9 及び表 1）。本稿ではまず、それぞれの型式のうち、出現時期の違いを顕著に示し

ている遺構の事例を紹介する。

5. 主アプシスの両側に小部屋を伴う型式の事例

エル・エイザリヤ：ラザロの教会（El-'Eizariya）（図 7: 1, 図 8: 1）¹⁰⁾

教会堂遺構は、ベタニヤ（Bethany）の「ラザロの墓（Tomb of Lazarus）」とされる遺構の東側に位置し、初期ビザンツ期の層序は二段階確認された¹¹⁾。教会堂は、330-390 年頃に創建され（第 1 期）、447 年に震災で倒壊したと考えられている。その後、別の教会堂が 5 世紀後半に再建されたと考えられている（第 2 期）。

第 1 期の教会堂は、西側構造が「ラザロの墓」と通じていた可能性も指摘されているが、現在のモスクの庭園と重なっており不確実である。それゆえ全体の平面規模についても確かな理解が得られていない。一方、東側構造は概ね明らかになっており、主アプシスの両側には小部屋が設けられた。北側の小部屋からは、幾何学模様のモザイクや側廊へと繋がる出入口が確認された。南側の小部屋の出入口は確認されていないが、側廊の舗床モザイクの切り替えも考慮する限り北側の構造と対になっていたと推察されている。なお、主アプシスの正面には身廊側へ張り出すように内陣が設置された。内陣と身廊の境界については舗床モザイクの装飾の切り替えによって明らかにされている。しかしながら、内陣障壁や身廊と内陣の間に段が設置されていたかについては確認されていない（Saller 1957: 15）。

第 2 期の教会堂は、第 1 期の教会堂が 447 年の地震によって倒壊した後に、5 世紀後半に再建されたと考えられている。当該教会堂の平面規模は 26×17.5 m で、主アプシスと内陣の構造（至聖所とも呼ばれる）は、第 1 期より東側に拡張されたことによって、やや大きめに建てられた。つまり、第 2 期の主アプシスは第 1 期のものが再利用されたのではなく、新設されたということである。当該時期においても、主アプシスの両側には小部屋が設けられた。

遺構の年代決定は、文献史料、舗床モザイクの図像、出土遺物によってなされた。第 1 期の教会堂については、330 年頃エウセビオス（Eusebius）によって書かれた地名録『オノマスティコン（Onomasticon）』には現れないが、ヒエロニムス（Hieronymus）が 390 年頃に注釈を加えた際、ベタニヤの教会堂の記述が付記されたことから¹²⁾、発掘者の S. J. サレル（Saller）によって 330 年から 390 年の間に創建されたと推察された。さらに、ヒエロニムスの記述はテオドシウス 1 世治世に創建されたとされるゲツセマネの教会堂に関する記録と言い回しが類似していること

から、教会堂は4世紀末に創建されたであろうとされる (Saller 1957: 30–31)。この地は、イエスと親しかったとされるラザロの甦った場所、通称「ラザロの墓」として知られており、ヒエロニムスはその墓の上に教会堂が建てられたと記した。発掘調査により、教会堂は墓の上ではなくやや東側に位置していたことが明らかにされたが、ヒエロニムスの記述は史料の信憑性に富んでいたと考えられる。サレルによれば、このような立地状況は他の教会堂事例にも確認されるという¹³⁾。また、381年から384年頃に聖地を訪問したエゲリア (Egeria) もベタニヤについて「エルサレムとその周辺の人々にとって中心的かつ重要な宗教儀礼が行なわれた」と記している¹⁴⁾。このことから、当該地に教会堂が存在したことは確かであると考えられる。

舗床モザイクの層序は二時期確認された (Saller 1957; Madden 2014: 32–33)。第1期の舗床モザイクは、身廊、両側廊から出土した。身廊は東側のみ明らかにされており、円の模様が格子状に連なって装飾されていた。北側廊には四角形や六角形の模様が格子状に描かれた。その東端には十字架の模様も確認された。南側廊には5つのパネルが存在し、そのうち2つが発掘調査時には残存していたとされる。東端には北側廊と同様に小さい十字架の模様が規則的に並べられていた。一貫して3色程度の幾何学模様であり、4~5世紀の舗床モザイクの特徴であるとされる¹⁵⁾。一方、第2期の舗床モザイクは身廊、両側廊、南側の小礼拝堂から出土した。身廊には、円の模様が格子状に連なって装飾された。また、大きなメダリオンや野菜の図像も描かれた。両側廊にはシンプルな白色モザイクが敷かれ、南側の小礼拝堂には幾何学模様と植物の図像が描かれた。動物の図像が検出されていないことなども踏まえ、5世紀に製作されたものであると推察されている (Saller 1957: 43)。

出土遺物は、土器、ランプ、ガラス、貨幣などが遺跡一帯から大量に検出された。土器についてはそれらの大半が墓地からの出土であったことに加えて、「ビザンツ期の土器」という枠組みで記されているため、教会堂の具体的な年代を示す資料としては十分ではないと考えられる。ランプとガラスについても同様である。また、貨幣は遺跡全体から100枚以上出土したとされるが、教会堂の年代について直接的な根拠となるものは確認されていない。つまり、当該教会堂の具体的な年代決定は、文献史料と舗床モザイクの図像に委ねられているということである。

第1期の教会堂が4世紀後半に創建されたと結論づけられたことについては、文献史料と舗床モザイクの意匠の双方によって妥当性が担保され得ると思われる。一方、第2期の年代決定は舗床モザイクの図像の

みに依るため、更なる検討の余地がある。しかし、周辺からビザンツ期の遺物が大量に出土していることから、当該教会堂がビザンツ期に建っていたことは確実であると考えられる。また、遺構の層序が二段階確認されており、第1期が4世紀末から5世紀前半に存在したとすれば、第2期がそれ以降に再建された教会堂であることは確実である。再建時には第1期より拡張されたものの、旧来の型式が踏襲されたことは注目値する。

ヒルベト・シュウエイケ (Kh. Shuweikeh) (図7: 2, 図8: 2)¹⁶⁾

教会堂遺構は、ラマッラ (Ramallah) とエルサレム (Jerusalem) を結ぶ幹線道路の西沿いに位置し、そこでは初期ビザンツ期の層序が3層確認された。それらのうち、中層と上層が教会堂遺構と考えられており、4世紀後半から5世紀前半に創建あるいは再建され (第2期)、6世紀に改修されたと考えられている (第3期)¹⁷⁾。下層は、損傷が激しくほとんど確認できないが、小規模の教会堂あるいは別の建造物であったと考えられている (第1期)。

第2期の教会堂は、平面規模27.7×11.4mの三廊式バシリカで、西側にアトリウムが備え付けられた¹⁸⁾。当該層には地元の石灰岩に加えて、輸入石材も含まれていたとされ、後者は第1期の建材の再利用の可能性もあると推察されているが、推測の域を出ない。なお、建材にはモルタルも使用され、遺構の随所にその痕跡が認められた。

第3期は6世紀頃であるとされ、教会堂の改修が行われて新たな舗床モザイクが敷かれた。また、北側には隣接して13.4×7.8mの礼拝堂も確認された。当該期の年代決定は出土貨幣に依拠している。

当該教会堂の年代決定は、墓石に記された銘文、舗床モザイクの図像、出土土器、出土貨幣の発行年によってなされた。

銘文 (図3) は教会堂遺構からの出土ではないが、隣接する同時期の層の墓から出土した楣石に刻まれていたものが年代決定の根拠の一つとされた。当該銘文は3行のギリシア語で記されており、発掘者らはL. ディ・セーニ (Di Segni) による各所での銘文分析

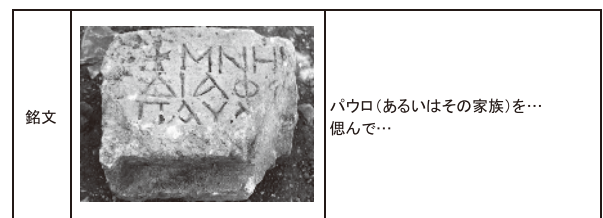


図3 ヒルベト・シュウエイケ出土の銘文 (Abu Khalaf et al. 2006 を筆者邦訳)

を参考にしつつ、書体は6世紀初頭以降には表現されない5世紀の特徴であることを確認した。また、教会堂遺構から出土した石灰岩製の柱頭の特徴が4世紀後半から5世紀前半を表していることから、それらを総合的に判断すると第2期の教会堂は4世紀後半から5世紀前半に創建されたものであると結論づけている。

なお、舗床モザイクは、北側の礼拝堂において残存状態が良好であり、黒・白・赤の3色で幾何学模様や花の模様が描かれていた。これらの図像は一般的なものであり、具体的な年代については報告書にも記されていない。

出土土器と貨幣については報告書では詳しく言及されていないが、土器はJ. マグネス (Magness) の編年 (Magness 1993) に基づいて3~5世紀に同定された。その編年によって、これらの土器は第1期から第2期に利用されたものであると考えられている。また、貨幣は6世紀に製作されたものが第3期の層から複数確認されたとされるが、出土地点などの考古学的情報は公開されていない。

以上を踏まえると、当該教会堂については年代決定の不明瞭さは残されているものの、発掘調査で3つの時期に区分されることは明白である。総合的に判断すると、少なくとも教会堂は二時期存在し、4~5世紀頃に利用された教会堂が6世紀頃に改修されていたと推察できるであろう¹⁹⁾。

ヒルベト・ベト・アヌン (Kh. Beit 'Anun)

(図7: 3, 図8: 3)²⁰⁾

教会堂遺構は、ヘブロン (Hebron) の北東5 kmに位置し、そこでは初期ビザンツ期の層序が2層確認された²¹⁾。教会堂は、5世紀以前に創建され (第1期)、6世紀に改修されたと考えられている (第2期)。なお、教会堂遺構の床下からはローマ時代の構造が確認され、発掘者によれば4世紀の遺構であったとされる。

第1期の平面規模は25.7×16.7 mで、西側には3つの出入りが設けられ、ナルテックスへと繋がっていた。主アプシスの両側には小部屋が設けられたとされる。主アプシスの正面から1.8×1.0 mの石板が出土し、四方にソケットが掘り込まれていたことから、当該遺構は祭壇を支える基盤であったと考えられている。北側の側廊については、発掘調査が第2期で留まっていたため詳細が明らかではないが、南側の第2期の側廊の床下からは切り石で覆われた空間が確認され、クリプトと推察された。また、ナルテックスの北西には8.2×4.6 mの小部屋 (通称「銘文の間」) が設置された。

第2期の教会堂は、ウマイヤ朝末期まで利用されたと考えられており、教会堂の北側に13.5×5.1 mの副

次的な礼拝堂が追加された。教会堂の舗床モザイクは、第1期の直上に張り直され、動物などの描写が導入されたことでさらに色彩豊かで鮮やかなものとなった。

遺構の年代決定は、舗床モザイクに施された5点の銘文 (以下、銘文1-5と表記) と舗床モザイクの図像、出土遺物によってなされた。

銘文 (図4) の分析は、ディ・セーニによって行われた (Di Segni 2012: 169-176)。銘文1は、第1期層のメインエントランス正面の身廊西端より出土し、タブラ・アンサータ形式で長方形の枠内には4行のギリシア語銘文が記された。書体から判断する限り5世紀中頃よりも前の製作であるとされる。当該銘文は恐らく、教会堂を建設あるいは献呈したプロバティウス (Probatius) という人物の貢献を讃えるためのものを墓碑調に記したとディ・セーニは指摘した。また、プロバティウスの名は「プロバトゥス=認められし」という意味のラテン語に由来し、3世紀後半から5世紀初頭によく見られた名前であるが、それ以降は流行らない名前であったとされる。

銘文2は、第1期層の南側廊西端より出土し、タブラ・アンサータ形式で長方形の枠内には4行のギリシア語銘文が記された。残存は、右側四分の一程度と中央部分の一部に留まっている。損傷部分の内容について

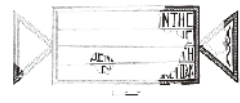
銘文1		ここに入る者、司祭プロバティウスのために祈らんことを。
銘文2		主よ、この村の住人を思い出してください。側廊をモザイクで舗床した彼らの救済の祈りのために。
銘文3		主よ、しもべである司祭たちタイモンとヨハネとヨハネを思い出してください、アーメン。
銘文4		主よ、管財人である助祭サラオンを思い出してください。
銘文5		主よ、奉献し、(…)した彼らを思い出してください。

図4 ヒルベト・ベト・アヌン出土の銘文 (Di Segni 2012: 169-176 を筆者邦訳)

ては推測の域を出ないが、ディ・セーニはシロ (Shiloh) などの他遺跡の事例を参考に訳出した。なお、文中の「側廊」は最終行の「ストア」にあたり、4世紀に年代づけられている、ハマト・ティベリアス (Hamat Tiberias) のシナゴグの舗床モザイクと、コラジン (Chorazin) のシナゴグの舗床モザイクで同様の用語が確認されているとされる。

銘文3と銘文4は、第1期層の「銘文の間」と呼ばれるナルテックスの北西に位置する副次的な部屋より出土した。部屋の中心に敷かれた長方形のモザイクパネルの東西にそれぞれ記された。東側の銘文には3行のギリシア語が記され、タイモンの名はアラビア語の名前がギリシア化したもので、「神のしもべ」を意味するという。西側の銘文には1行のギリシア語が記され、サラオンはセム語由来の名前であったとされる。また、末語の「オイコノモス」には「司祭を経済的に支える管財人」や「教会堂管理人」、「修道院の管財人」といった複数の意味があるが、当該教会堂の場合は銘文3に見る限り、少なくとも3人の司祭がおり且つそれなりの規模を有していたため、サラオンを「管財人」と見解づけているとディ・セーニは推察した。

銘文5は、第2期層の後の時代に建て増しされた北側廊の北側の部屋から出土した。タブラ・アンサータ形式で長方形の枠内には2行の銘文が残存していた。

舗床モザイクの図像についてはR. アミル (Amir) が検討している (Amir 2012: 455-459)。第1期層では、ナルテックス、身廊、側廊、「銘文の間」より検出された。ナルテックスのモザイクは3つのパネルに分かれ、北側は十字架、中央はひし形、南側は円の模様が連続して描かれている。身廊の中心パネルには2種類のひし形模様が重なるように施された。そのパネルを囲むように、小さな十字架の模様が並べられている。また、両側の側廊には白を基調としたモザイクに小さな十字架が規則的に並べられている。その模様は身廊の枠組みと同様のものではなかった。「銘文の間」のモザイクは、正方形の中に小さな四葉形が描かれた模様が連続して描かれ、パネルの上下には銘文が記された。総じて、第1期の舗床モザイクに使用された色彩は3~4色であったが、一つ一つの図像は非常に細やかで整然と並べられている。

第2期層では、教会堂全面の舗床モザイクが様々な幾何学模様で張り直されたことが確認された。ナルテックスでは、光沢のある4色のテッセラが使用され、組紐飾りや連続する円の飾りによって縁取られた。身廊の中央パネルには、八角形と円の模様が整然と連続して並べられている。また、八角形と円の中には様々な動植物が描かれている。なお、動物の図像は、後代にイコノクラスムの影響を受けていたことが確認された。南側廊は小さな四角い模様が格子状に引

かれた模様の中に収められ、北側廊は小さなイチョウ形の花模様が半円形の模様の中に収められ、いずれも連続して描かれている。また、第2期に導入された北側の小礼拝堂にも舗床モザイクが敷かれ、中央のメダリオンを囲むように四角とひし形で構成された幾何学模様が描かれ、さらにその周りを組紐飾りが幾重にも連なって縁取られた。メダリオンの中には十字架が描かれている。

出土遺物は、土器と貨幣が主なものであった。報告書によれば、ビザンツ期の土器は6~7世紀に年代づけられるものが出土したとされる (Magen 2012: 160-166)。貨幣は6点出土し、そのうち2点は判読が困難であった。2点は67年のユダヤ戦争期の貨幣で、ナルテックスより検出され、1点はコンスタンティヌス2世治世 (355-361年) の貨幣で主アプシスの床下より検出され、もう1点は4世紀の貨幣で主アプシスの東より検出された。これらの出土貨幣は、当該教会堂の創建前のものであることから、年代決定の根拠としては不十分であると考えられる。

当該教会堂の層序の残存状態は比較的良好であり、舗床モザイクの図像の在り方が大きく変化していたことが明確に示されている。また、銘文資料が豊富に検出されたため、報告者による創建年代の信頼性を担保し得ると考えられる。岩盤まで掘削され教会堂構造の下にはローマ時代の構造物も確認されたことや8世紀のイコノクラスムの影響を受けた痕跡が残されていたことも考慮すれば、当該教会堂が4~5世紀に創建され、6世紀に再建されたという年代決定は妥当であると考えられる。

6. 主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式の事例 ネア教会 (The Nea Church) (図7: 31, 図9: 32)²²⁾

この教会堂遺構は、エルサレム旧市街の現ユダヤ人地区の南端に位置し、543年に創建され、614年に破壊されたことが明らかにされている。遺構の大半が未発掘であるため全容は不明であるが、平面規模は少なくとも100×52m以上あり、大規模構造であったことは確かである (Avigad 1993)。アプシスについては、南側の副アプシスしか検出されていないが、中央と北側のアプシスを想定して3つのアプシスが備わっていたと考えられている。

遺構の年代決定は、主に文献史料と銘文資料によってなされた。文献史料はプロコピウス (Procopius) の記録が確認されており、それによればユスティニアヌス1世が543年にマリアの伝承を記念して当該地に教会堂を創建したとされる²³⁾。また、6世紀に製作されたとされるいわゆる「マダバ・マップ (Madaba Map)」にも教会堂が示されていることから、この時

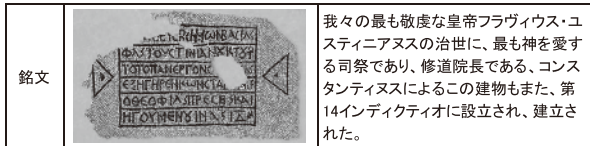


図5 ネア教会出土の銘文 (Di Segni and Gellman 2017: 30 を筆者邦訳)

期に教会堂が存在したことは確かであると考えられる。

銘文(図5)は教会堂の外壁から出土し、タブラ・アンサータ形式の枠内には6行のギリシア語銘文が記された(Di Segni and Gellman 2017)。当該銘文には教会堂の創建年が記されており、それによれば第14インディクティオのユスティニアヌス帝の治世であるとされる。

以上を踏まえると、当該教会堂は文献史料と銘文資料の双方から創建年代が明らかにされていることから、ユスティニアヌス帝の治世に創建されたことは確実であろう。教会堂の全容は明らかにされていないものの、エルサレムを代表する非常に大きな建造物であったと考えられる。創建当初から副アプシスが設けられていたことの意義は大きい。

ヒルベト・アイン・ファティル (Kh. 'Ein Fattir) (図7: 33, 図9: 33)²⁴⁾

教会堂遺構は、「聖ステファノの墓 (Tomb of St. Stephen)」の伝承で知られるベト・ジマル (Beth Jimal) の修道院の東1.2 km に位置し、ビザンツ期の層序は二段階確認された²⁵⁾。下層については、教会堂遺構であったことは認められているものの創建年代は明らかにされていない(第1期)。一方、上層は5世紀後半から6世紀前半に年代づけられている(第2期)。第1期の平面規模は16.25×11 m で、西側には3つの出入り口が設けられ、ナルテックスと繋がっていたとされる。東端には主アプシスと、南側廊の延長上に副アプシスが検出された。主アプシスは第1期から存在したものであり、副アプシスは第2期に追加されたものであると考えられている。後者が前者と異なる種類の石積みで構築されていたことがその根拠とされる。第2期では、教会堂の北側に二つの部屋と南側に一つの部屋が設けられ、平面規模は16.25×16.10 m であったとされる。当該時期には色彩豊かな舗床モザイクが敷かれ、主アプシスの南側の小部屋の奥には副アプシスが設けられた。

遺構の年代決定は、舗床モザイクに施された銘文と舗床モザイクの図像によってなされた。銘文は、内陣へと繋がる階段と身廊の間から出土し、タブラ・アンサータ形式の枠内には5行のギリシア語銘文が記された。当該銘文には、司教アナスタシオス及び舗床モザイクの製作者クラウディアノス、イマヌエルの3名の

名前と舗床モザイクの製作年が記されていた。司教アナスタシオスがエルサレムのパトリアルキを指すのであれば、461年または476年に製作され、エレウテロポリス(現ベト・グヴリン)のアナスタシオスを指すのであれば536年頃に製作されたものであると推察されている²⁶⁾。

舗床モザイクは、第2期の身廊、内陣及び側廊から検出された。身廊には2つのパネルが施され、中央パネルには複雑な幾何学模様に加えてライオンやヤギが描かれていた。もう1つのパネルは中央パネルの東側すなわち内陣との間に敷かれており、大きなメダリオンの中に様々な模様が描かれた。当該パネルには上述の銘文も含まれていた。これらの舗床モザイクは、5世紀後半から6世紀前半に敷かれたものであると特定された。動物図像が描かれていることも踏まえれば、年代決定には妥当性が認められるであろう。内陣の舗床モザイクも身廊と同じく動物やメダリオンが描かれた。一方、主アプシスの舗床モザイクは内陣中心部と比べてシンプルなもので、白基調の床に花のつばみがドット状に描かれた。側廊の舗床モザイクは残存状態が悪く、具体的な年代決定が困難であるとされるが、層序は二段階確認されており、南側の副アプシスは第2期に導入されたものであるとされる。つまり、上述の年代決定に従えば、副アプシスは5世紀後半から6世紀前半に追加された機能であると考えられる。

以上を踏まえると、第2期の年代決定は、豊富な資料によって概ね信頼性が得られるであろう。銘文については、具体的な製作年に複数の可能性を含みつつも年代幅が5世紀後半から6世紀前半に絞り込まれている。この年代決定に基づけば、第1期はそれ以前の時代に充てられるが、具体的な年代については今後の報告が待たれる。いずれにせよ、南側の副アプシスが第2期に導入されたことは層序から明らかになっており、主アプシスの両側に小部屋を伴う型式から副アプシスを伴う型式へと改変された数少ない事例と捉えることができる。

ヒルベト・アイン・ダブ (Kh. 'Ein Dab) (図7: 34, 図9: 34)²⁷⁾

当該遺構は、ヘブロンの北西10 km の町ベト・アウラ (Beth Aula) のさらに北3.3 km に位置している。平面規模は24×13.6 m で、西側には3つの出入り口とナルテックスが設けられた。東端の中央には主アプシスが設けられ、その両側にはやや小さい副アプシスが備えられたと推察された。なお、南側の副アプシスについては検出されていないため、確かな理解が得られていない。発掘調査は部分的なものであり、全体像の把握には至っていないが、色彩豊かな舗床モザイクが全面に敷かれていたとされる。また、教会堂の

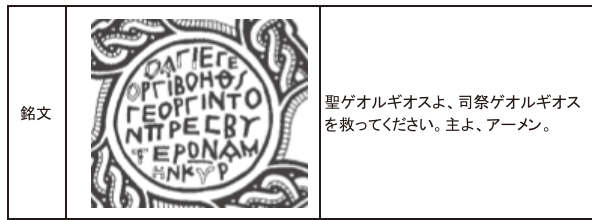


図6 ヒルベト・アイン・ダブ出土の銘文 (Peleg 2012: 44 を筆者邦訳)

北側からは2つの部屋が検出された。発掘者によれば2つのうち東側の部屋は小礼拝堂として機能したとされる²⁸⁾。教会堂は、6世紀前半に創建され、8世紀に廃絶したと考えられている。

遺構の年代決定は、舗床モザイクに施された銘文、舗床モザイクの図像、出土遺物によってなされた。

銘文(図6)は、教会堂北側の側廊より出土し、メダリオンの中にギリシア語が4行にわたって記されていた。その書体の特徴によって6世紀に製作されたとされる。

舗床モザイクは、身廊、両側廊、柱間、主アプシスなど教会堂全面から出土した。身廊での残存は部分的であり、ぶどうの房などの植物やメダリオンが描かれ、その枠組みにはかぎ十字形や四角形の模様が施された。側廊にはつばみの絵図がひし形の格子状に施され、その周りにメダリオンが囲うように描かれた。このモザイクには12色ものテッセラが使用された。側廊や柱間の舗床モザイクについては東側の一部しか明らかにされていないが、身廊と同様に幾何学模様やメダリオン、動植物が描かれていた。主アプシスの舗床モザイクは、フレームの一部が検出され、輪の図像が波状に連ねられていた。いずれも精巧に施された図像であった。

出土遺物については、その多くが後代の開墾などの影響を受けており原位置を留めていないとされている。たとえば、土器やガラスはビザンツ期からマムルーク期にかけてのものが満遍なく出土したとされる。貨幣については遺跡内から9点検出された。最も古い年代の貨幣は、内陣正面の床下から出土し、マクシミアヌス治世の293年のものであったとされる。4点の貨幣は、6世紀半ばからウマイヤ期のものであったとされる。1点目はナルテックスの舗床モザイクの基礎部分から出土したもので、ユスティニアヌス1世治世の548～549年に年代づけられた。その他3点は南側廊から出土したもので、ユスティヌス2世治世の575～576年、コンスタンズ2世治世の7世紀半ば、ウマイヤ期の8世紀に製作されたものとされる。そして残りの4つはマムルーク期のものであった。

複数の考古資料の相互判断により、6世紀前半とは特定できないものの、6世紀に創建されたことは確実

であると考えられる。なお発掘者によれば、唯一北側の外壁は岩盤まで掘削され、切り石が数段積み重ねられていたことを確認したが、破壊の痕跡が著しいと記している。つまり、当該教会堂の下層には何らかの遺構が存在した可能性が残されており、それについては今後の報告が待たれる。さらに、北側の小礼拝堂については平面図や詳細な情報が明らかにされていないが、本堂と同時期に創建されたものであるか更なる検討が必要であろう。

7. 各型式の出現時期

以上の事例に加えて、主アプシスの両側に小部屋を伴う型式と主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式のそれぞれについて分類すると図7-9及び表1のようになる。前者の型式は、後者の型式と比べて事例数が多く、4世紀から7世紀まで幅広い時期での出現が認められた。換言すれば、教会堂が新設される際には当該型式も積極的に採用されていたということである。さらに、ネゲヴ地域やガリラヤ地域と異なる点は、改修あるいは再建時においても副アプシスを伴う型式に改変されることなく、当該型式が維持される事例が多く存在したということである。これらの現象を踏まえると、ユダヤ・サマリア地域では副アプシスの設置が教会堂建築において重要事項ではなかった可能性が考えられる。

一方、後者の型式は事例数が少なく、とりわけ主アプシスの両側の小部屋を副アプシスに改変した事例については、ヒルベト・アイン・ファティル(図7: 33)とヒルベト・エル・マカティル(Kh. el-Mukatir)(図7: 36)の2基しか確認されなかった。その上、ヒルベト・エル・マカティルの年代決定は考古学的根拠に乏しく、創建時期や型式については確かな理解が得られていない。つまり、ユダヤ・サマリア地域では、主アプシスの両側の小部屋から副アプシスへの改変がネゲヴ地域ほど顕著ではなかったことを意味している。上述の通り、当該地域では改修あるいは再建時も旧来の型式が維持される傾向にあり、建築型式の改変に対して保守的であったと考えられる。

しかし、主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式16基の年代決定について整理してみると、不確実な大分類Cを除けば、すべて5世紀後半以降に出現が認められることが明らかになった。大分類Cには文献史料で4世紀から5世紀前半に創建されたと記されている事例も複数挙げられるが、それらは考古資料との整合性が担保されておらず、年代は不明である。たとえば、エルサレムのゲツセマネ・苦悶の教会やシオンの丘の教会、プロバティカの教会はそれに該当する。以上をまとめると、ユダヤ・サマリア地域では、

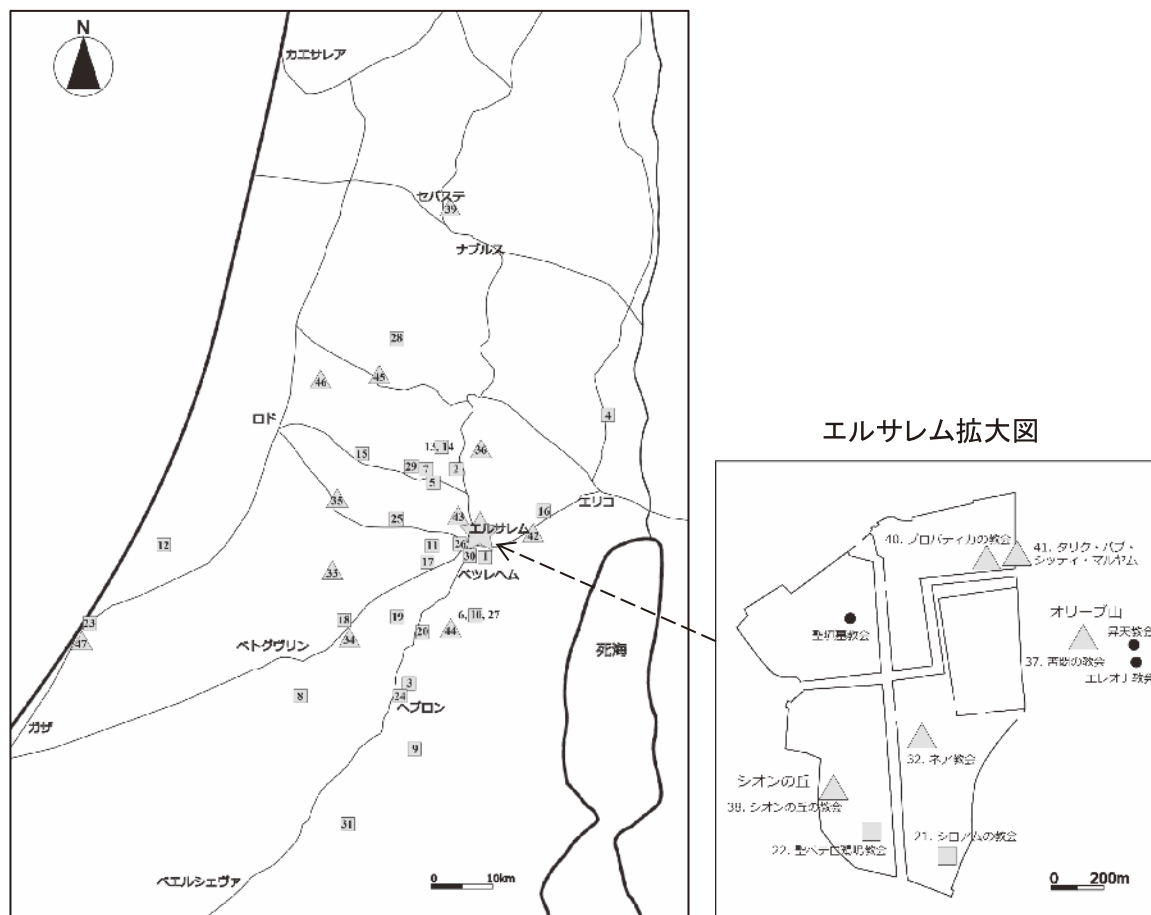


図7 対象遺構の所在地（47基：遺跡名と番号は表1参照）
□：主アプシスの両側に小部屋を伴う型式
△：主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式

個々の教会堂が改修あるいは再建される場合には大きな型式変化を伴わなかったが、新設される場合には一部の教会堂で主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式が採用されたということを意味している。そして、その現象は全て5世紀後半以降に生じていたことも明らかである。つまり、事例数は多くないが、出現時期に着目するとネゲヴ地域やガリラヤ地域の一部の事例と同様の傾向が見られることが確認された。

以上の分析によって、主アプシスの両側に小部屋を伴う型式は4世紀から継続的に建てられたが、主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式は、その出現を5世紀後半まで待たねばならないことが指摘できる。

8. まとめ

アプシス周辺の型式について、本稿では次のようにまとめたい。まず、ユダヤ・サマリア地域では、主アプシスの両側に小部屋を伴う型式から副アプシスを伴う型式へと改変された事例が非常に少ないことを確認した。先行研究では、6世紀頃から典礼の在り方に大

きな変化が生じたことによって、主アプシスの両側の構造に変化がもたらされたと考えられてきたが、少なくとも当該地域ではその傾向が顕著に現れなかった。むしろ、改修後も創建当初からの型式が維持される傾向にあり、主アプシスの両側の小部屋の役割は残っていたと考えられる。当該地域の教会堂について言えば、その大半が既存の教会堂構造を維持していたことから、典礼の在り方の変化と連動していたとは考えにくい。また、創建当初から副アプシスを伴う型式であった教会堂の多くはエルサレムに集中していることから、一種の流行のような現象であった可能性も示唆される。それについては考古学的根拠が見出せず推測の域を出ないが、各教会堂の財政事情に左右される面も大きかったのではないかと考えられる。主アプシスの両側構造を大幅に改変するためには、技術的・資金的余裕がなければ実現されなかったであろう。副アプシスではなくニッチ（壁龕構造）に留められている事例が散見されるのは、そのような事情によるものであった可能性も大いに考えられる。

一方、創建当初から主アプシスの両側に副アプシス

表1 対象とした教会堂遺構の型式別一覧

通 番 号	分 類	遺跡名／呼称(ある場合のみ)	年代決定方法						年代決定されている時期 (E=前半, L=後半)							本稿で参照した調査報告書	
			文 献	銘 文	図 像	土 器	貨 幣	建 築	4E	4L	5E	5L	6E	6L	7-		
主アプシスの両側に小部屋を伴う型式																	
1	A1	エル・エイザリヤ	ラザロの教会	○		○	○	○			創建			再建			Saller 1957
2	A2	ヒルベト・シュウェイケ			○	○	○				創建			改修			Abu Khalaf et al. 2006
3	A2	ヒルベト・ベト・アヌン			○	○					創建			改修			Magen 1990, 2012
4	A2	ヒルベト・エル・ベユダット			○	○	○						創建	改修 改修			Hizmi 1990, 1993
5	A2	ヒルベト・エル・ラタイン			○	○							創建	改修			Greenfield 2012
6	A2	ヘロディオ	北教会堂		○	○							創建				Netzer 1990; Netzer et al. 1993
7	A2	ヒルベト・ベト・シラ			○	○	○							創建 改修			Batz 2012
8	A2	ヒルベト・ベイト・ロイア			○	○							創建				Patrich and Tsafrir 1993
9	A2	ヒルベト・イスタブル			○	○	○									創建	Peleg and Batz 2012
10	B2	ヘロディオ	東教会堂		○	○								利用			Netzer 1990; Netzer et al. 1993
11	B2	アイン・ケレム	殉教者の教会		○	○						利用					Malka ed. 2012b
12	B2	ヒルベト・バルカ	司教ヨハネの教会		○	○	○						創建?				Sion and Rapuano 2012
13	B3	ヒルベト・エツ・ティラ	東教会堂			○	○	○			利用						Al-Houdalieh 2016
14	B3	ヒルベト・エツ・ティラ	西教会堂			○	○	○			利用						Al-Houdalieh 2014
15	B3	ヒルベト・フリヤ				○						利用					Har-Even and Greenfield 2012
16	B3	マアレ・アドウミン				○	○	○						利用			Magen 2008
17	B3	アイン・エル・ハニヤ				○					利用						Baramki 1934
18	B3	ヒルベト・ズル	第2期のみ(第1期は小部屋なし)			○	○							利用			Batz and Sharukh 2012
19	B3	ヒルベト・フベイル				○								利用			Abel 1925; Vincent 1939
20	B3	ヒルベト・ブレイクト				○				クリプト?				利用			Tsafrir and Hirschfeld 1976, 1993
21	C	エルサレム	シロアムの教会	○					○				創建?	?	改修?	?	Ovadiah 1970
22	C	エルサレム	聖ペテロ鶏鳴教会	○								創建?	?	?	?	?	Ovadiah and de Silva 1981
23	C	アシュケロン・バルネア	北教会堂	記載なし						?	?	?	?				Varga 2010
24	C	ラマト・エル・ハリル	マムレの教会	○						創建?	?	?	?	?	?	?	Malka ed. 2012b
25	C	デイル・エル・アズハル				○							?	?	?	?	Vincent 1907
26	C	ケテフ・ヒノム		記載なし							?	?	?	?	?		Barkay 2000
27	C	ヘロディオ	中央教会堂			○								?	?	?	Netzer 1990; Netzer et al. 1993
28	C	ヒルベト・ハマド				○				ビザンツ期							Aronsham 1997, 2012
29	C	ヒルベト・エル・マフマ		記載なし						ビザンツ期							Har-Even 2012
30	C	デイル・アブ・トル		記載なし						ビザンツ期							Goldfuss and Gozlan 1985; Sion 2008
31	C	ヒルベト・ヤツティル	エリアC		○	○				ビザンツ期							Malka ed. 2012b
主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式																	
32	A1	エルサレム	ネア教会	○	○		○	○						創建			Avigad 1993
33	A2	ヒルベト・アイン・ファティル			○	○				創建(+小部屋)				改修 (+副アプシス)			Chambon and Strus 1991, 1993; Strus 2003a, 2003b
34	A2	ヒルベト・アイン・ダブ			○	○	○	○						創建			Peleg 2012
35	B1	エマウス	南教会堂	○		○							利用				Vincent 1948
36	C	ヒルベト・エル・マカティル				○	○	○		創建?	改修?	改修?	?	?	?		Byers et al. 2016
37	C	エルサレム	ゲツセマネ・苦悶の教会	○					○	創建?	?	?	?	?	?	?	Orfali 1924
38	C	エルサレム	シオンの丘の教会	○	○					創建?	?	?	?	再建?	?	?	Vincent and Abel 1922
39	C	セバスティア	聖洗礼者ヨハネの教会	○	○								?	?	?	?	Crowfoot 1937
40	C	エルサレム	プロバティカの教会			○							創建?	?	?	?	de Vaux and Rousee 1957; Rousee 1962; Ovadiah and de Silva 1981
41	C	エルサレム	タリク・バブ・シッティ・マルヤム	記載なし							?	?	?	?			Ovadiah 1970
42	C	ハン・エル・アフマル		○		○								?	?	?	Chitty and Jones 1928
43	C	ヒルベト・エル・マサニ							○					?	?		Mazor 2000
44	C	ベト・シャアル			○	○									?	?	Vincent 1903
45	C	アブッド	聖マリアの教会			○				ビザンツ期							Taha 1997
46	C	ヒルベト・エル・ビラ		記載なし						ビザンツ期							Dar and Safrai 1982
47	C	アシュケロン			○	○				ビザンツ期							Stager and Esse 1987

主アプシスの両側に小部屋を伴う型式 * 発掘報告書より転載(ただし、平面図あるいは想定図が公開されていない遺構については、Malka eds. 2012a, 2012b等の想定図を転載)				
1. エル・エイザリヤ: ラザロの教会(第1期) (Saller 1957)	1. エル・エイザリヤ: ラザロの教会(第2期) (Saller 1957)	2. ヒルベト・シュウエイケ(第3期) (Abu Khalaf et al. 2006)	3. ヒルベト・ベト・アヌン(第1期) (Magen 2012)	3. ヒルベト・ベト・アヌン(第2期) (Magen 2012)
4. ヒルベト・エル・バユダット (Hizmi 1990)	5. ヒルベト・エル・ラタティン (Greenfield 2012)	6. ヘロディオン: 北教会堂 (Netzer 1990)	7. ヒルベト・ベト・シラ (Batz 2012)	8. ヒルベト・ベト・ロイア (Patrik and Tsafir 1993)
9. ヒルベト・イスタブル (Peleg and Batz 2012)	10. ヘロディオン: 東教会堂 (Netzer 1990)	11. アイン・ケレム: 殉教者の教会 (Malka ed. 2012b)	12. ヒルベト・バルカ: 司教コハネの教会 (Sion and Rapuano 2012)	13. ヒルベト・エツティラ: 東教会堂 (Al-Houdaleh 2016)
14. ヒルベト・エツティラ: 西教会堂 (Al-Houdaleh 2014)	15. ヒルベト・フリヤ (Har-Even and Greenfield 2012)	16. マアレ・アドゥミン (Magen 2008)	17. アイン・エル・ハニヤ (Baramki 1934)	18. ヒルベト・ズル (Malka ed. 2012a)
19. ヒルベト・フベラ (Malka ed. 2012b)	20. ヒルベト・ブレイト (Tsafir and Hirschfeld 1993)	21. エルサレム: シロアムの教会 (Ovadiah 1970)	22. エルサレム: 聖ペテロ鶏鳴教会 (Ovadiah and de Silva 1981)	23. アシュケロン・バルネア: 北教会堂
				平面図情報なし
24. ラマト・エル・ハビル: マムレの教会 (Malka ed. 2012b)	25. デイル・エル・アズハル (Malka eds. 2012b)	26. ケテフ・ヒノム (Barkay 2000)	27. ヘロディオン: 中央教会堂 (Netzer 1990)	28. ヒルベト・ハマド (Aronsham 2012)
29. ヒルベト・エル・マフマ (Har-Even 2012)	30. デイル・アブトル (Goldfuss and Golan 1985)	31. ヒルベト・ヤツティル: エリアC (Malka ed. 2012b)	厳密には、6、11、14、22は主アプシスの存在が確認されていない。 また、10、26についてもアプシス周辺の構造が明らかにされておらず、当該図面は想定によるものであると考えられる。本稿では、主アプシスとその両側の構造に着目したため、これらの事例も含めて検討した。	

図8 主アプシスの両側に小部屋を伴う型式の平面図

主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式 * 発掘報告書より転載(ただし、平面図あるいは想定図が公開されていない遺構については、Malka eds. 2012a, 2012b等の想定図を転載)			
32. エルサレム: ネア教会 (Avigad 1993)	33. ヒルベト・アイン・ファティル (Strus 2003b)	34. ヒルベト・アイン・ダブ (Peleg 2012)	35. エマウス: 南教会堂 (Vincent 1948)
36. ヒルベト・エル・マカティル (Byers et al. 2016)	37. エルサレム: ゲツセマネ・苦悶の教会 (Orfali 1924)	38. エルサレム: シオンの丘の教会 (Vincent and Abel 1922)	39. セバスティア: 聖洗礼者ヨハネの教会 (Crowfoot 1937)
40. エルサレム: プロパティカの教会 (Ovadia and de Silva 1981)	41. エルサレム: タリク・バブ・シッティ・マルヤム (Ovadia 1970)	42. ハン・エル・アフマル (Chitty and Jones 1928)	43. ヒルベト・エル・マサニ (Mazor 2000)
44. ベト・シャアル (Malka ed. 2012b)	45. アブッド: 聖マリアの教会 (Taha 1997)	46. ヒルベト・エル・ピラ (Dar and Safrai 1982)	47. アシュケロン (Stager and Esse 1987)

図9 主アプシスの両側に副アプシスを伴う型式の平面図

を伴う型式であった教会堂については当該地域から複数確認された。そしてそれらは最も出現時期の早いものでも5世紀後半に年代づけられることも明らかになった。

なお、ネゲヴ地域では、教会堂に隣接して6世紀頃から小礼拝堂が付設される傾向が認められており、先行研究ではアプシス周辺の構造の変化と関連づけられてきた。ユダヤ・サマリア地域でも小礼拝堂の付設は確かに確認されているが、副アプシスを伴う型式の事例が少ないため、両者の関係性を見出すことが困難である。主アプシスとその両側の小部屋の構造を維持しつつ小礼拝堂が付設されたとすれば、上述の通り、それらの型式変遷は別々の事情によるものであった可能

性が高いと考えられる。それについては次稿の課題とする。

謝辞

本研究は、住友生命保険相互会社第13回「未来を強くする子育てプロジェクト／女性研究者への支援(スミセイ女性研究者奨励賞)」の助成による成果の一部です。本稿を執筆するにあたり、指導教員である慶應義塾大学の杉本智俊先生よりご教示を頂きました。また、江添誠先生、間倉裕生様からも貴重なご意見を賜りました。パレスチナ自治区での現地調査に際しては、パレスチナ考古局長であるジハッド・ヤシン(Jehad Yasin)氏をはじめ、アウニ・シャワムラ(Awni Shawamra)氏、モハメド・ジャラダット(Mohammad Jaradat)氏に大変お世話になりました。皆様に深く御礼申し上げます。

註

- 1) パレスチナ全域の教会堂建築については Crowfoot 1941; Ovadiah 1970; Ovadiah and de Silva 1981, 1982, 1984; Bottini et al. 1990; Tsarfir 1993; Tsarfir et al. 1998; Bagatti 2001, 2002a, 2002b に詳しい。
- 2) 現在言われる「ユダヤ・サマリア地域」は、一般にパレスチナ西岸地区を指す。本研究では、当該期の地理的区分に準拠して沿岸部も対象に含める。ただし、ペラについては現在のヨルダンに位置するため対象外とした。
- 3) ユダヤ・サマリア地域の教会堂建築については、註 1 に加えて Malka ed. 2012a, 2012b に集成されている。ただし、当該書はイスラエルの調査に基づく情報が大半であり、パレスチナ自治区の調査については考慮されていない。後者の調査情報については、イスラエル／パレスチナ間の諸問題も相まって公開が限定的であるため、本稿では各発掘調査の中間レポートや記事も参照した。
- 4) 具体的な方法として、土器・ランプ、貨幣などが挙げられる。江添 2014 では、当該地域の土器及びランプの変遷についてわかりやすくまとめられている。
- 5) 主アプシスの両側の「小部屋」には「パストフォリア *pastophoria*」という用語があてられることが多い。しかし、初期ビザンツ期においては当該空間がパストフォリアとして機能したということについて考古学的な確証が得られていない。それゆえ本稿では「小部屋」と記すことにする。
- 6) なお、マムシトの東教会堂の小部屋からは聖遺物箱が検出されたため、副アプシスを伴わない型式であっても聖人崇拜や殉教者崇拜と関係する機能を果たしていた可能性があることも示唆されるが、マルガリットはそれ以上の言及を控えている (Margalit 1989: 145)。
- 7) マルガリットによれば、従来はヒルベト・ヘシェクの教会堂は 5 世紀末から 6 世紀初頭、ヒルベト・エイラヴの教会堂は 6-7 世紀に年代づけられており、主アプシスの両側に小部屋を伴う型式であったと認識されていたとされる。
- 8) 従来の説に従えば当該型式は 4 世紀には確認されないはずであり、論考に矛盾が生じている。
- 9) Patrìch 2006a: 344-345 で聖体拝領の方法と両側の小部屋の役割について詳しく述べられている。
- 10) エル・エイザリヤは、初期ビザンツ期のベタニヤと同定されており、1949-53 年に発掘調査が行われ、教会堂遺構が検出された。Saller 1957; Ovadiah 1970: 29-30; Ovadiah and de Silva 1982: 125-126; Malka ed. 2012b: 49-51 に詳しい。
- 11) 本稿では、古い層から順に、第 1 期、第 2 期と表記する。
- 12) Eusebius, *Onomasticon* 58: 15 および Hieronymus, *Onomasticon* 59: 16。本稿では、Freeman-Grenville et al. 2003 の英訳を参照した。
- 13) パレスチナの事例では、ヘブロン、ジェラシュ、マムレ、エド・ディルウェ、エルサレムのプロバティカの教会に同様の傾向が見られ、いずれも聖人の墓の東側に教会堂が建設されたという。Saller 1957: 31 に詳しい。
- 14) *Itinerarium Egeriae* 29。本稿では、Wilkinson 1981 の英訳を参照した。
- 15) クロウフットはベツレヘムやジェラシュの教会堂と比較し、アヴィ・ヨナはバイトシェアンやヘブロン教会堂と比較し、このように結論づけた。Saller 1957: 28 に詳しい。
- 16) ヒルベト・シュウエイケでは、1996-2001 年及び 2003 年に発掘調査が行われ、教会堂遺構が検出された。Ovadiah 1970: 125-126; Bagatti 2002a: 120-122; Abu Khalaf et al. 2006; Malka ed. 2012a: 264 に詳しい。
- 17) 本稿では、古い層から順に第 1 期～第 3 期と表記する。

- 18) 報告書の平面図には、主アプシスの両側にパストフォリアのような空間が認められるが、それについては言及されていない。
- 19) なお、当該教会堂の調査はパレスチナ考古局 (MOTA) による成果であり、イスラエル考古学庁 (IAA) の集成には反映されていない。後者の集成では教会堂の利用年代は 7-8 世紀とされているが、その年代決定は層序を十分に検討していない古い調査に依拠していると考えられる。
- 20) ヒルベト・ベト・アヌンでは、1993 年及び 1997 年に発掘調査が行われ、教会堂遺構が検出された。Ovadiah 1970: 107; Ovadiah and de Silva 1982: 148; Magen 1990: 275-286, 2012: 121-168; Bagatti 2002b: 71-73; Malka ed. 2012b: 181-186 に詳しい。
- 21) 本稿では、古い層から順に第 1 期、第 2 期と表記する。
- 22) ネア教会は現在のユダヤ人居住区に位置し、1969-1971 年に発掘調査が行われた。当時の調査では南側の副アプシスとそこから延びる壁面しか確認されなかったが、その後の調査でおおよその規模が明らかになった。Ovadiah and de Silva 1981: 221-222; Avigad 1993 に詳しい。
- 23) 関谷 2003: 242-243 では、当該教会堂に関するプロコピウスの記録について詳しく説明されている。
- 24) ヒルベト・アイン・ファティルでは、1989 年と 1990-97 年に発掘調査が行われ、教会堂遺構が検出された。Chambon and Strus 1993; Bagatti 2002b: 135-136; Strus 2003a, 2003b; Malka ed. 2012b: 83-84 に詳しい。
- 25) 本稿では、古い層から順に第 1 期、第 2 期と表記する。
- 26) Chambon and Strus 1993 では、銘文資料は公開されておらず、その概訳に限定されている。
- 27) ヒルベト・アイン・ダブでは、1999 年に発掘調査が行われ、教会堂遺構が検出された。Malka ed. 2012b: 150-152; Peleg 2012: 37-60 に詳しい。
- 28) 報告書では当該部分の平面図は公開されていない。

参考文献

- Abel, F. M. 1925 Église byzantine au Khirbet Hebeileh. *Revue Biblique* 34: 279-282.
- Abu Khalaf, M., I. Abu A'mar, S. H. Al-Houdalieh and R. Hoyland 2006 The Byzantine and Early Islamic Settlement of Khirbat Shuwayka. *Web Journal on Cultural Patrimony* 2: 47-76.
- Al-Houdalieh, S. H. 2014 The Byzantine Church of Khirbet et-Tireh. *Journal of Eastern Mediterranean Archaeology & Heritage Studies* 2(3): 188-208.
- Al-Houdalieh, S. H. 2016 The Byzantine Eastern Church of Khirbet et-Tireh. *Archaeological Discovery* 4: 48-67.
- Amir, R. 2012 Mosaic Floors in Judea and Southern Samaria. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. III: Churches and Monasteries in Samaria and Northern Judea*, 445-488. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Aronshtam, A. 1997 A Byzantine Church at Khirbet Hamad. *Atiqot* 32: 177-182 (English summary: 49).
- Aronshtam, A. 2012 A Byzantine Church at Khirbet Hamad. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. III: Churches and Monasteries in Samaria and Northern Judea*, 1-8. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Avigad, N. 1993 The Nea: Justinian's Church of St. Mary, Mother of God Discovered in the Old City of Jerusalem. In Y. Tsarfir (ed.), *Ancient Churches Revealed*, 128-135. Jerusalem, Israel Exploration

- Society.
- Bagatti, B. 2001 *Ancient Christian Villages of Galilee*. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Bagatti, B. 2002a *Ancient Christian Villages of Samaria*. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Bagatti, B. 2002b *Ancient Christian Villages of Judaea and the Negev*. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Baramki, D. C. 1934 An Early Christian Basilica at 'Ain Hanniya. *Quarterly of the Department of Antiquities in Palestine* 3: 113-117.
- Barkay, G. 2000 Excavations at Ketef Hinnom in Jerusalem. In Y. Tsafir (ed.), *Ancient Jerusalem Revealed*, 85-106. Jerusalem, Biblical Archaeology Society.
- Batz, S. 2012 A Byzantine Church at Khirbet Beit Sila. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. III: Churches and Monasteries in Samaria and Northern Judea*, 373-408. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Batz S. and I. Sharukh 2012 A Roman Bathhouse and Two Byzantine Churches at Khirbet Zur. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. IV: Churches and Monasteries in Judea*, 1-36. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Bottini, G. C., L. Di Segni, E. Alliata and V. C. Corbo 1990 *Christian Archaeology in the Holy Land. New Discoveries*. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Byers, G. A., D. S. Stripling and B. G. Wood 2016 Excavations at Khirbet el-Maqatir: the 2009-2011 Seasons. *Judea and Samaria Research Studies* 25(2): 69-109.
- Chambon, A. and A. Strus 1991 Ein Fattir. *Excavations and Surveys in Israel* 10: 31-33.
- Chambon, A. and A. Strus 1993 Ein Fattir - 1990. *Excavations and Surveys in Israel* 12: 82-84.
- Chitty, D. J. and A. H. M. Jones 1928 The Church of St. Euthymius at Khan el-Ahmar, near Jerusalem. *Palestine Exploration Fund Quarterly Statement* 61: 175-178.
- Crowfoot, J. W. 1937 Churches at Bosra and Samaria-Sebaste. *British School of Archaeology in Jerusalem*. Supplementary Paper 4. London, Issued by the Council.
- Crowfoot, J. W. 1941 *Early Churches in Palestine*. London, Oxford University Press.
- Dar, S. and Z. Safrai 1982 Khirbet el-Bireh. *Excavations and Surveys in Israel* 1: 11-13.
- de Vaux, R. and J. M. Rousee 1957 Chronique archéologique. *Revue Biblique* 64: 226-228.
- Di Segni, L. 2012 Greek Inscriptions from the Central Church at Beit 'Anun. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. IV: Churches and Monasteries in Judea*, 169-176. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Di Segni, L. and D. Gellman 2017 A Justinian Inscription North of Byzantine Jerusalem, and Its Importance for the Dating of the Nea Church Inscription. In Y. Gadot, Y. Zelinger, K. Cytryn-Silverman and J. Uziel (eds.), *New Studies in the Archaeology of Jerusalem and Its Region Collected Papers Volume XI*, 27-37. Jerusalem, Hebrew University.
- Freeman-Grenville, G. S. P., R. L. Chapman and J. Taylor 2003 *The Onomasticon by Eusebius of Caesarea: Palestine in the Fourth Century A.D.* Jerusalem, Carta.
- Goldfuss, H. and J. M. Gozlan 1985 Abu Tor. *Excavations and Surveys in Israel* 4: 51-52.
- Greenfeld, U. 2012 A Byzantine Church at Khirbet el-Latatin. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. III: Churches and Monasteries in Samaria and Northern Judea*, 417-428. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Har-Even, B. 2012 A Byzantine Monastery and Church at Khirbet el-Mahma. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. III: Churches and Monasteries in Samaria and Northern Judea*, 363-372. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Har-Even, B. and U. Greenfeld 2012 A Byzantine church and monastery at Khirbet Huriya. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. III: Churches and monasteries in Samaria and northern Judea*, 309-326. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Hizmi, H. 1990 The Byzantine Church at Khirbet el-Beiyudat: Preliminary Report. In G. C. Bottini, L. Di Segni, E. Alliata and V. C. Corbo (eds.), *Christian Archaeology in the Holy Land. New Discoveries*, 245-264. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Hizmi, H. 1993 The Byzantine Church at Khirbet el-Beiyûdât in the Lower Jordan Valley. In Y. Tsafir (ed.), *Ancient Churches Revealed*, 155-163. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Madden, A. M. 2014 *Corpus of Byzantine Church Mosaic Pavements from Israel and the Palestinian Territories*. Paris, Peeters.
- Magen, Y. 1990 A Byzantine Church at Beit 'Einun (Beth 'Anot) in the Hebron Hills. In G. C. Bottini, L. Di Segni, E. Alliata and V. C. Corbo (eds.), *Christian Archaeology in the Holy Land. New Discoveries*, 275-286. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Magen, Y. 2008 The Inn of the Good Samaritan at Ma'ale Adummim. In Y. Magen (ed.), *The Samaritans and the Good Samaritan*, 281-314. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Magen, Y. 2012 The Central Church at Beit 'Anun. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. IV: Churches and Monasteries in Judea*, 121-168. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Magness, J. 1993 *Jerusalem Ceramic Chronology: Circa 200-800 CE*. Sheffield, JSOT Press.
- Malka, A. H. (ed.) 2012a *Christians and Christianity. Vol. I: Corpus of Christian Sites in Samaria and Northern Judea*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Malka, A. H. (ed.) 2012b *Christians and Christianity. Vol. II: Corpus of Christian Sites in Judea*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Margalit, S. 1989 On the Transformation of the Mono-apsidal Churches with Two Lateral Pastophoria into Tri-apsidal Churches. *Liber Annuus* 39: 143-164.
- Mazor, G. 2000 A Church at Khirbet el-Maşani North of Jerusalem. *'Atiqot* 40: 17-23 (English summary: 159).
- Negev, A. 1974 The Churches of the Central Negev: An Archaeological Survey. *Revue Biblique* 81(3): 400-421.

- Negev, A. 1993 The Cathedral at Haluza (Elusa). In Y. Tsafirir (ed.), *Ancient Churches Revealed*, 286–293. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Netzer, E. 1990 The Byzantine Churches of Herodium. In G. C. Bottini, L. Di Segni, E. Alliata and V. C. Corbo (eds.), *Christian Archaeology in the Holy Land. New Discoveries*, 165–176. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Netzer, E., R. Birger-Calderon and A. Feller 1993 The Churches of Herodium. In Y. Tsafirir (ed.), *Ancient Churches Revealed*, 219–232. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Orfali, P. G. 1924 *Gethsémani ou notice sur l'église de l'Agonie ou de la prière d'après les fouilles récentes accomplies par la Custodie Franciscaine de Terre Sainte (1909 et 1920)*. Paris, Picard.
- Ovadia, A. 1970 *Corpus of the Byzantine Churches in the Holy Land*. Bonn, Peter Hanstein.
- Ovadia, A. and C. G. de Silva 1981 Supplementum to the Corpus of the Byzantine Churches in the Holy Land. Part I: Newly Discovered Churches. *Levant* 13: 200–261.
- Ovadia, A. and C. G. de Silva 1982 Supplementum to the Corpus of the Byzantine Churches in the Holy Land. Part II: Updated Material on Churches Discussed in the Corpus. *Levant* 14: 122–170.
- Ovadia, A. and C. G. de Silva 1984 Supplementum to the Corpus of the Byzantine Churches in the Holy Land. Part III: Appendices. *Levant* 16: 129–165.
- Patrich, J. 2006a The Transfer of Gifts in the Early Christian Churches of Palestine: Archaeological and Literary Evidence for the Evolution of the “Great Entrance.” In B. Caseau, J.-C. Cheynet and V. Déroch (eds.), *Pèlerinages et lieux saints dans l'antiquité et le moyen âge: Mélanges offerts à Pierre Maraval*, 341–393. Paris, Association des Amis du Centre d'Histoire et Civilisation de Byzance.
- Patrich, J. 2006b Early Christian Churches in the Holy Land. In O. Limor and G. G. Stroumsa (eds.), *Christians and Christianity in the Holy Land: From the Origins to the Latin Kingdoms*, 351–395. Cultural Encounters in Late Antiquity and the Middle Ages, Volume 5. Turnhout, Brepols Publishers.
- Patrich, J. and Y. Tsafirir 1993 A Byzantine Church Complex at Horvat Beit Loya'. In Y. Tsafirir (ed.), *Ancient Churches Revealed*, 265–272. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Peleg, Y. 2012 A Byzantine Church at Khirbet 'Ein Dab. In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. IV: Churches and Monasteries in Judea*, 37–60. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Peleg, Y. and S. Batz 2012 A Byzantine Church at Khirbet Istabul (Aristobulias). In N. Carmin (ed.), *Christians and Christianity. Vol. IV: Churches and Monasteries in Judea*, 303–326. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Rousee, J. M. 1962 Chronique archéologique. *Revue Biblique* 69: 107–109.
- Saller, S. J. 1957 *Excavations at Bethany (1949–1953)*. Jerusalem, Franciscan Printing Press.
- Sion, O. 2008 Jerusalem, Abu Tor: Final Report. *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel*. <https://www.jstor.org/stable/26592774>. (2020 年 5 月 11 日閲覧)
- Sion, O. and Y. Rapuano 2012 The Church of Bishop John at Khirbet Barqa-Gan Yavneh. In L. D. Chrupcala (ed.), *Christ is Here! Studies in Biblical and Christian Archaeology in Memory of Michele Piccirillo, ofm*, 125–130. Milano, Edizioni Terra Santa.
- Stager, L. and D. L. Esse 1987 Ashkelon, 1985–1986. *Israel Exploration Journal* 37: 68–72.
- Stemberger, G. 2000 *Jews and Christians in the Holy Land. Palestine in the Fourth Century*. Edinburgh, T&T Clark.
- Strus, A. 2003a Bet Gemal and the Byzantine Tradition Regarding St. Stephen. In F. Masetto (ed.), *Ecce Ascendimus Jerosolyman*, 399–418. Roma, Editrice LAS.
- Strus, A. 2003b *Khirbet Fattir - Bet Gemal. Two Ancient Jewish and Christian Sites in Israel*. Roma, Editrice LAS.
- Taha, H. 1997 A Salvage Excavation at the 'Abudiyah Church in Abud - Samaria. *Liber Annuus* 47: 359–374.
- Tsafirir, Y. 1993 The Early Byzantine Town of Rehovot-in-the-Negev and Its Churches. In Y. Tsafirir (ed.), *Ancient Churches Revealed*, 294–302. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Tsafirir, Y., L. Di Segni and J. Green 1998 *Tabula Imperii Romani Iudaea Palaestina: Eretz Israel in the Hellenistic, Roman and Byzantine Periods, Maps and Gazetteer*. Jerusalem, Israel Academy of Sciences and Humanities.
- Tsafirir, Y. and Y. Hirschfeld 1976 Khirbet Bureikut. *Israel Exploration Journal* 26(4): 206–207.
- Tsafirir, Y. and Y. Hirschfeld 1993 The Byzantine Church at Horvat Berachot. In Y. Tsafirir (ed.), *Ancient Churches Revealed*, 207–218. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Varga, D. 2010 Ashqelon, Barne'a (North). *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel*. https://www.hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.aspx?id=1368&mag_id=117. (2020 年 4 月 7 日閲覧)
- Vincent, L. H. 1903 Les ruines de Beit Cha'ar. *Revue Biblique* 12: 612–614.
- Vincent, L. H. 1907 Église byzantine et inscription romaine à Abou-Ghoch. *Revue Biblique* 16: 414–421.
- Vincent, L. H. 1939 II. L'Église byzantine de Hebeileh. *Revue Biblique* 48: 87–90.
- Vincent, L. H. 1948 La chronologie du groupe monumental d' 'Amwas. *Revue Biblique* 55: 348–375.
- Vincent, L. H. and F. M. Abel 1922 *Jérusalem. Recherches de topographie, d'archéologie et d'histoire. Tome second: Jérusalem nouvelle. Fascicule III: La Sainte-Sion et les sanctuaires de second ordre à l'intérieur de la ville*. Paris, Lecoq-Gabalda.
- Wilkinson, J. 1981 *Egeria's Travels to the Holy Land*. Liverpool, Liverpool University Press.
- 江添 誠 2014 「パレスチナにおけるローマの支配とキリスト教会堂の成立」長谷川修一（編）『考古学からみた聖書の世界 月本昭男先生退職記念献呈論文集第2巻』259–283頁 聖公会出版。
- 関谷定夫 2003『聖都エルサレム 5000年の歴史』東洋書林。